

かいこ
蚕を観察してみよう!

観察
スタート!



①気に入った部屋をさがします



②部屋がきまりました



③糸を出しはじめて繭づくりの足場をつくります。



④部屋が汚れないように、部屋の外へ糞や尿を出します。体をキレイな状態にして眠りにそなえます。



⑥繭づくり本格開始



⑦繭が完成

■滑川町 養蚕の今

昔は、1トン以上の繭を生産する優良養蚕家(1トン会の会員)として一生懸命生産しました。多いときは、蚕を屋外でも飼ったこともありました。

養蚕で子供を大学に行かせ、娘には振袖も買いました。養蚕で生活を支えた時代でした。

昔は、春、夏、初秋、晩秋、晩々秋、初冬の年6回生産したこともありましたが、今は、春、夏、晩秋の3回、細々と養蚕業を継承しています。

■『滑川町 養蚕の今』作成にあたって

今日、滑川町では、養蚕業を営む農家は、たった一軒となってしまいました。わが国の高度経済成長を支え、また、当町においても盛んに行われていた養蚕業を決して忘れることなく、後世へ伝え残していくことを切に望みます。



生産者の紹介 飯塚 金夫さん・和子さん

【連絡先】

滑川町 産業振興課

〒355-8585

埼玉県比企郡滑川町大字福田750-1

TEL:0493-56-6906 FAX:0493-56-2448

E-mail:na3411601@town.namegawa.lg.jp

滑川町

養蚕の今

養蚕と絹生産

一般財団法人大日本蚕糸会 養蚕技術研究所資料より

蚕は桑の葉を摂食する狭食性の昆虫で卵・幼虫・蛹及び蛾の四つの変態の過程を経て1世代を完了します。蛹の時代は外敵に対しても無防備であるため、繭という一種の防衛のための巣をつくりませんが、人類はこれを利用して絹をつくってきました。



朝鮮半島から日本へ

一般財団法人大日本蚕糸会 養蚕技術研究所資料より

地球上ではじめて蚕を飼いはじめたのは中国であると考えられています。中国ではじまった養蚕は、その後朝鮮半島を経て3世紀ころわが国に伝わりました。

わが国には古くから、「おしら様」、「おしら神」あるいは「おしら講」といった養蚕に関する土俗信仰が各地にあります。これは新羅(しらぎ)と深い関係があるものと考えられており、日本の養蚕が朝鮮半島と関係があることを物語っています。



埼玉県では

埼玉県立文書館資料より

埼玉県における蚕糸業は、江戸時代より県の北西部や中央部などで農家の副業として行われていましたが、幕末の横浜開港により、蚕種や生糸は外貨獲得のための重要な輸出品となりました。そこで、明治期に入ると県は積極的に蚕糸業振興を図り、蚕種や生糸の品質管理を徹底させ、近代的製糸機械の導入による増産を目指し、県の代表的な産業になりました。海外からのさらなる生糸需要の増大に応えるため、大正期には製糸工場の生産が拡大し、県の重要物産の首位を占め、輸出用生糸の生産高は国内第4位となりました。昭和初期の世界恐慌では蚕糸業も影響を受けましたが、本県の生糸生産量は、昭和戦前期を通じて増産傾向を続けました。

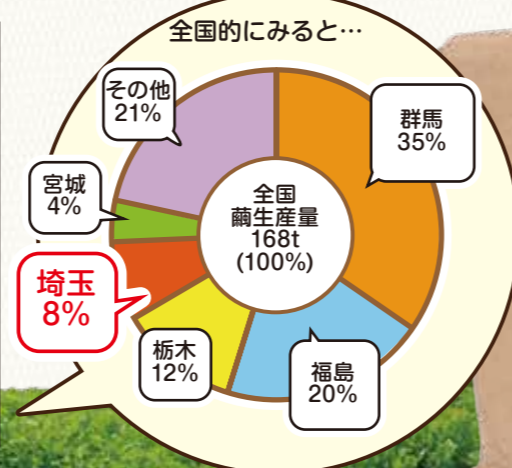


その後、輸入生糸の増加、きもの離れなどの影響により、昭和50年代には、桑園面積、養蚕戸数、繭生産量が減少を始め、昭和43年に13,200トン記録した埼玉県の繭生産量も、平成25年には13トン(養蚕戸数41戸)となっています。



関東地方における養蚕農家数及び繭生産量の現状

H25年	農家数(戸)	繭生産量(t)
茨城	21	7
栃木	26	20
群馬	181	58
埼玉	41	13
千葉	7	2
東京	5	0.4
山梨	15	4
長野	22	5
全国	486	168



※関東農政局 特産農産物の動向より

養蚕の主な工程

宮内庁ホームページ 一般財団法人大日本蚕糸会ホームページより

①. 掃立て

蟻蚕(孵化したての蚕)を、蚕座(蚕を飼育する道具)に移し細かく刻んだ桑の葉を与えて飼育を始めること。羽ぼうきを使って蟻蚕に掃き下ろすことから掃立てと呼ばれています。



蚕は、卵から繭になるまで4回脱皮します(5齢で繭をつくる)。近年、滑川では農家の負担を軽減することもあり3齢幼虫で配蚕(農家へ配ること)されるため、掃き立ての工程は、農家では行っていません。

②. 給桑

蚕に桑を与えることを給桑と呼びます。



③. 上族

族とよばれる繭づくり専用の器具へ蚕を移すことを上族と呼びます。族を複数取り付けた回転族は、熟蚕(繭をつくる5齢の蚕)が垂直方向に登ろうとする性質(背地性)を利用し、蚕が族の上部に集まると重力によって回転し、蚕が族の各部屋に収まるまで回転を繰り返します。



④. 収繭または繭掻き

繭を族から外すことを収繭または繭掻きと呼びます。



現在は、②以降が、滑川町の養蚕農家の作業

滑川町の養蚕 昔話 「なめがわの養蚕とくらし」より

●繭代金

和泉 森田 延治郎
明治三十五年生

私がまだ十五才位の頃、その年の初蚕種の繭は非常によくできて、熊谷より繭買いに来た商人に販売し、父が荷車にて近所の方も一緒に持って行った。父も若かったし、幸いにも割合早く熊谷に着き、繭買の家へ繭をおろし、繭代金とその日の手間代をもらい、車をひいて家路についた。

当時熊谷への道は追いはぎが出る等の噂もあり、父は考えた。この時、繭代金百円札1枚と小銭を途中で追いはぎに出られたらどうしようと百円札を紙に包み、下帯に入れてしっかりと腰に巻きつけて、帰ってきた。

和泉に入り、大入の沼の西まで来て、はじめてホッと安心して来たという。父は家に帰り、すぐ下帯より百円札を取り出し、恵美須様之供えて、我々に百円札を見せてくれた。

夢のような話である。昔繭代金が農家をささえるいかに大事なお金であったか。

